202308227　朝礼拝　ヤコブの手紙 1 章 19～27 節

「聴いたことを実践してみる」

先日の 21 日・22 日と、5 年ぶりに全国同信伝道会神学協議会が開催されました。これは、2 年の 1 度開催される同志社大学神学部出身の牧師の集まりで、コロナ禍を挟んでしまいましたので、5 年ぶりということになりました。全国各地から、母校の同志社大学に集い、まぁ、色々な話をします。5 年分の話題をそれぞれ持ち寄るわけですから、賑やかになるのは当然です。今日の聖書箇所とは、真逆の様子でしたが、近況を聞きたいというよりも、近況を話したい、という割合の方が高かったかと思います。私も、洗礼を授けてくれた牧師先生に久しぶりに会いましたので、色々と話を聞いてもらいました。振り返ると、私の教会生活の始まりも、礼拝に来て牧師の話を聞くのではなくて、面会日に行って牧師に話を聞いてもらう、というものでした。その関係性が、未だに続いているということが、なんだか恥ずかしもあり、懐かしもありました。まぁ、その牧師先生も、懇親会でお酒が入ったら、たくさん話してくれたんですけどね。「自分の話を聞いてくれる人がいる」。ただ、それだけでお互いに幸せな気持ちになるんじゃないかと思います。なので、懇親会の席は、とってもみんな幸せそうでした。実は、この神学協議会、信徒の方の参加もＯＫなので、2 年後、ご興味のある方は、是非一緒に行きましょう。なんと言いますか、知らない世界が垣間見えるかも知れません。

さて、この神学協議会では楽しい懇親会の前に、ちゃんと専門家による講演会を拝聴します。今回は、神学部を退官されたばかりの石川立先生という方が講師をされました。石川先生は、聖書学がご専門です。ただ、今回の講演会の内容は、聖書学的なものではなくて、いたって実際的なものでした。このコロナ禍で否応なしに進んだ教会におけるＩＣＴ化についてのお話でした。敦賀教会

では、礼拝のオンライン配信や、オンライン献金と言ったことは実施しませんでしたが、そういった情報通信技術を用いた新しい礼拝、新しい教会運営を始めたところも多々ありました。その成果は、もちろんあったわけですが、メリット、デメリットを今回、改めて教えてもらうことができました。メリット側の考え方としては、そもそもコロナ禍じゃなくても、様々な事情で教会に来られない人は、すでにいたわけですから、ある意味、コロナ禍は、そうした既存の課題をあぶり出したに過ぎないというものです。教会の色々なことをオンライン化にすることで、以前から教会に来られない人が、かえって教会に繋がるようになった、という実績報告もありました。これに関しては、敦賀教会でも、教会総会を書面開催にした時に、普段なら総会出席が叶わない信徒の参加もあったことが思い出されます。コロナ禍によるオンライン化の流れは、そうした離れた信徒を繋ぎ留める一面がありました。一方で、デメリットとしては、当たり前のことですが、「やっぱり、集まらないと寂しい」という根源的な願いが満たされないことでした。石川先生は、この「集まらないと寂しい」という点について、「触れ合いって、大切ですよね」と言われました。もっともそれは、「べたべた触れる」とか「身体的接触を密にする」とか、そういうことではなくて、実際に出会って言葉を交わしてみないと分からない、わずかな目の動きや、手の所作や、身体のこわばりや、何か言いたそうにしているけど、言い出せない雰囲気とか。そういう言葉以外のメッセージを読み取る、ということですね。ちなみに、石川先生は、「触り合い」ではなくて、「触れ合い」なんだと。言葉の詳しい違いとしては、「触る」というのは、一方通行であり、お互いの了解が得られていないものですが、「触れる」とは、双方向的で、お互いの無理のない了解が得られているもの、という、若干の意味の違いがあるのだとか。石川先生は、そういう「触る」と「触れる」の微妙な違いも手掛かりにして、教会がオンライン化を進める中で、牧師・信徒・求道者の間の「触れ合い」が生じないことを、心配されていました。

ＩＣＴとかオンラインとかインターネットとか、そういう技術について馴染み深い世代の私ですが、この石川先生のお話は、確かにその通りだな、と思いました。私も、誰かと話すなら、あるいは、話を聞いてもらうなら、お互いの表情や所作の微妙な変化を読み取れるくらいの近さが欲しいと思います。こうやって、講壇の上から、偉そうに話していますが、でも、同じ空間にいて、この礼拝堂の同じ雰囲気を味わっているという経験は、礼拝をし、教会を共に担う上で、欠かすことはできないものです。ここで少々神学的・哲学的なことを言うなら、古代ギリシャにおいて、肉体は精神を縛る不要な存在であると考えられていました。肉体は病にかかるし、傷つくし、死んでしまうからです。今回のコロナ禍においても、肉体の持つ、そうした脆弱性は露になりました。他者とコミュニケーションをとる上で、私たちのこの身体は「感染対策」という点において、とても邪魔になってしまったのです。しかし、キリスト教では、この弱く脆い身体は、とても大切なものです。この身体は神様の似姿であり、神様が不思議な御業で形作ってくださったものです。そして、我らの主イエス・キリストが復活する時、その肉体は、刺し貫かれた傷さえもそのままに蘇られました。身体は痛みを感じ、苦しみを憶えるものですが、でも、この身体があるからこそ、私たちは痛みへの共感を学び、優しさを知って、お互いの苦しみを軽くするために助け合うことができます。もちろん、痛くないに越したことはありませんが、その痛みがあるからこそ知れる「触れ合い」を通した恵みもあろうというものです。

今日の聖書箇所も、「触れ合い」がテーマになっています。もちろん、先ほど言ったように「べたべた触れる」とか「身体的接触を密にする」とか、そういうことではありません。私たちには、配慮すべき隣人がいる、ということです。触れ合い、思い合い、心を砕き合う人がいるのだ、と。だから、その隣人のために、次のことを実践しなさい、と言って、19 節から 27 節至る御言葉が語られていきます。今回の聖書箇所が含まれる「ヤコブの手紙」は、少々特殊でして、この聖書が正典

として編纂される段階においても、かなり難癖をつけられたという歴史があります。なんで、そうなったかと言うと、22 節の御言葉ですね、「御言葉を行う人になりなさい」。これは、つまり「御言葉を聴いて信じるだけで大丈夫」とされる信仰義認とは真逆の命令ということです。「聞くだけで終わるものになってはいけません」と。アブラハムの伝承に始まり、パウロの手紙の中にも、「信じるだけで大丈夫」という信仰義認の考え方が、非常に重要なものとして語り継がれてきました。私たちプロンプト教会が生まれる契機となった宗教改革を担ったマルティン・ルターも、この信仰義認の考え方を強く持っていました。なので、ルターは、このヤコブの手紙を「藁の書簡」と言って、かなり低い評価をしていました。

けれど、信仰義認が・・・「信じることによって救われる、神様に良しとされる」ということが、完全に正しいのだとしても、身体を持ち、痛みを感じ、苦しみを知る私たちは、その信仰が、誰かの労りと励ましになるよう、やっぱり行動を起こすべきなんじゃないかと思うのです。神様を愛することはクリスチャンの最重要テーマです。でも、自分のように隣人を愛することも、つまり、隣人のために配慮し、行動することも大事ですよね。この手紙を書いたヤコブという人は、マタイによる福音書 22 章 37～40 節に書かれている「神を愛し、隣人を自分のように愛せよ」というイエス様の御言葉を、「実践しなさい」と言っているのだと思います。

実は、この「ヤコブの手紙」、手紙と言うより、どうやら説教として語られた言葉の原稿あるいは逐語録のようでして、これを読むだけで、ヤコブという人の言いたかったメッセージは、伝わるんじゃないか、という、それくらいの分かりやすさがあります。「聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」とは、古今東西言われている、どの文化圏においても通じる普遍的な格言です。牧師は、どちらかというと喋りたがりなので、牧師としても弁えておきたい部分ですね。22 節の「御言葉を行うものになりなさい」とは、これを語ったヤコブさんのメインテーマ

だと言えます。「御言葉を聴いたら、それを実践しないとダメだよ」と。ただ、続く 23 節と 24 節のたとえ話は、よく分かりません。「鏡に映る自分の姿」ということを引き合いに出していますが、これは、現代ほどには鏡が普及していなかった当時、「生まれつきの顔」、つまり、髪もとかず、化粧もせず、ひげもそらず、洗顔もしてない、「生まれつきの顔」を鏡に映して、「うわ、変な顔」と思ったとしても、鏡の前から立ち去ってしまえば、「変な顔」だった自分のことを忘れて、気にしなくってしまう、ということです。これは、「生まれつきの変な顔」を受け入れるとか、どうかとかいう自己肯定感のお話ではなく、整えるべき姿、振る舞うべき行いを聞いて知っていながら、それをしない、ということへの忠告です。そういうたとえ話なんですね。私たちは「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめる」必要があると言います。この文脈における「律法」とは、ユダヤ教における法規定と言うよりも、21 節にある「心に植え付けられた御言葉」との関連から、おそらく先天的に持ち得ている「良心」のことだと思います。あと、「自由をもたらす」という点については、私たちが自分の欲望や衝動に従って生きる場合、それは、まことに自由な生き方ではないという前提に立って、神様の御言葉を受け入れ、私たちがすでに持ち得ている良心に従う生き方こそ、翻って自由を勝ち取っているということです。そして、そんな風な人は「その行いによって幸せになります」と、ヤコブさんは言うわけです。

26 節・27 節は、キリストの教会が常に心に留めるべき理念を表しています。自分の信心深さを測る時に、祈りの巧みさ、讃美歌の上手さ、教会としての厳かさ、立派さを考えるようではいけませんよ、と。御言葉に聞き、良心に従って、私たちは自分の為すべき業をすでに知っているはずです。その 1 例として、「みなしごや、やもめが困っている時に世話をすること」「世の汚れに染まらないように自分を守ること」が取り上げられています。教会の内部において、神様のために整えられた礼拝を一生懸命に捧げることは、とても大切です。けれど、私たちの為すべきことは「それだ

け」ではなくて、隣人のために行動すること、そして、自分自身を正しく律して清らかであることも大切なんですね。

今日は、「ヤコブの手紙」から御言葉を聴きました。せっかく聴いたのだから、何か一つでも実践に移すことが出来れば、それが神さまの御心に適うということかと思います。無理はせず、自分を欺かず、自然と御言葉を行う人になれるように。今週も祈りながら、励んで参りたいと願う者であります。

お祈りを致します。

神さま。今日も、私たちのために尊い安息日を備えてくださり、感謝致します。今日は、あなたの御言葉を聴くことの大切さ、そして、聴いたことを実践することの大切さを聖書から学びました。私たちの信じる心は本物ですが、その心にさらに磨きをかけて、あなたのために、そして、隣人のために、良き奉仕者となることができますように、どうか私たちの行いの一つ一つを支え、導いてください。今日から始まる１週間も、聴くのに早く、話すのに遅く、怒るのにも遅く、また、御言葉を素直に受け入れて行動し、あなたの御前に清く汚れない歩みを為していくことができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

9月召天者を憶える祈り

コヘレトの言葉3章1〜11節

1天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。

2生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

3殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、

4泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、

5石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり抱くことをやめるに時があり

6捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、

7裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、

8愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。

9働く者はその労することにより、なんの益を得るか。

10わたしは神が人の子らに与えて、ほねおらせられる仕事を見た。

11神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

大東寿美子　おおひがし　すみこ　し　(2018年9月2日召天)

中野末造兄　なかの　すえぞう　けい　(1975年9月3日召天)

山登信義兄　やまと　のぶよし　けい　(1994年9月3日召天)

源田仁吉兄　げんだ　にきち　けい　(1977年9月9日召天)

西田雅恵姉　にしだ　まさえ　し　(1986年9月13日召天)

島　萬寿姉　しま　ます　し　(1949年9月14日召天)

清水辰郎兄　しみず　たつろう　けい　　（1954 年 9 月 14 日召天）

羽根じゅん姉　はね　じゅん　し　　（1996 年 9 月 14 日召天）

幸田はる姉　こうだ　はる　し　　（2010 年 9 月 16 日召天）

増田正雄兄　ますだ　まさお　けい　　（2003 年 9 月 17 日召天）

木村照子姉　きむら　てるこ　し　　（2012 年 9 月 24 日召天）

関谷カズ子姉　せきや　かずこ　し　　（2014 年 9 月 27 日召天）

神様。あなたによって夏から秋へと移りゆく変わり目の日々を今、私たちは過ごしています。月と太陽をも支配し、実りと収穫の季節へとこの世界を導いてゆくあなたは、私たちの人生という名の季節をもお定めになり、その移ろいをも支配しておられます。今日、私たちは、9 月に天へと召された敬愛する方々のことを憶えて祈りを合わせています。あなたがいつ、何を理由に、人の命を取られるのかを私たちは知ることができません。しかし、全てのものの支配者であり、また全き愛を顕される、あなたの下へと召された魂には、豊かな慰めと限りない平安があることを信じます。私たちもいずれは、この地上での歩みを終えて、あなたの住まうところへと帰ってゆきます。それまでの間、天の上にあるとの同じ、大いなる恵みとあなたの深い愛を感じることのできる日々を、どうかお与えください。天にあっても、地にあっても、あなたと共なる日々が祝福で満たされますように。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名を通して、あなたの御前にお捧げ致します。